

ヘーゲル『精神の現象学』にみる人間の自立性の本質

——「一方の行為」の挫折から他者存在を知る必然性——

初めに

本論は、「人間の自立性」というものの根源について考えていくものである。現代に生きる私たちにとって、自立的に存在するということは自明のことのように思われる。つまり、私たちは確かに自分を自立的であるように感じるし、「私は自立的である」と確信を持って言うことができる。しかしこの自立性は何の前提もなく存在するものではない。私たちが自立的な存在となるまでには、さまざまな契機が前提となってきたのである。その諸契機とは、私たちの世界であり、肉体であり、そして他者存在である。すでに自明な存在であるこれらの契機がなければ、私たちは存在意義をもちえない、つま

り「自立的」であるとは言えないのである。

「自己を知る意識」の叙述

自立性のために必要なこれらの「前提」というものを根底から考えるためには、ヘーゲルの主著のひとつ、『精神の現象学 (Phänomenologie des Geistes)』が参考となる。彼はこの著作で意識 (Bewusstsein) の成長を叙述した。意識とは、人間存在の主観的側面を端的に表したものである。なぜこのような叙述をしたか。ヘーゲルは、哲学がいつべんに真理を解説することを独断的であると考え、真理を語れるようにするために、以前の哲学とは一線を画する方法を取った。つまり、最も直接的・単純な意識形態が必然的な経緯によって自己展開し、

佐藤 啓 太

哲学的な認識をする「絶対知」の立場(つまり真理を解説することができる立場)までたどりつく道程を叙述するという方法を取ったのだ。途上の意識自身の立場から哲学者の立場の正当性を確保することで、自分の叙述する真理の体系が独断的で押しつけ的なものになることを回避しようとしたのである。

こうしてヘーゲルは自分の体系に正当性を与えようとしたのであるが、その道程は意識にとって容易なものとしては設定されていない。意識は繰り返し躓き、挫折し、そのたびに自分の過ちを修正していかなくてはならない。だが、自分の失敗によって真実が少しずつ見えてくるのである。

意識は初めに目前の対象を見る。そのとき自分自身のこととは意識していない。つまり自分の「自立性」というものに気づいていない。そして意識は、目前にある対象が何かということを徹底的に追求することで、対象が「自分に対しての存在である」ということに気がつく。

こうして意識は初めて自分自身に気がつく。意識は自分の自立性を直接的に直観した、つまり意識は自己意識(Selbstbewusstsein)になったのである。つまり「私は

私である」と言う。

対象を見ていた意識とは異なり、自己意識は実践的な行動を取る。「私は私である」と言うだけではあまりに漠然としているから、自分の存在すなわち自立性を具体的に・客観的に確証しようとするのである。そこで自己意識の性格は、「他在(自分でないもの)を廃棄すること」で自分の自立性を確証する」というものになる。「自分でないもの」を否定すれば、「自分が存在する」ということを証明できる、という理屈なのだ。このような性格が自己意識の根源的なものとして説明されているのであるから、この性格こそが自己意識つまり人間の根本をなす性格とされている。そして、ここから自己意識の経る経験が人間の自立性のための端的な前提を作り上げてゆくものとなる。

自己意識は何の障害もなく自立性を獲得することはできない。むしろ自己意識は、自分が追求するものを手に入れることができない。だがこの挫折は、「自立性」というものの実態を明らかにする。失敗は成功への導きになるように、自己意識は自分の取った方法が現実で失敗することで、本来の自立性へ進む道を自分で明らかにす

るのである。

自己意識が取ったその方法とは、「自分の自立性を現実的に確認するために、他在を廃棄する」というものであった。つまりこの方法は一方的な行為である。この方法を取り続けるかぎり、自己意識は真の自立性を得ることはできない。むしろ、この方法による目的の達成をあきらめた自己意識の方が、真の自立性を獲得する可能性をもつことになる。

このような経緯を、ヘーゲルは『精神の現象学』「自己意識」の章で叙述している。とくにこの章の前半三分の二を占める「IV. 自己確信の真理」と「A. 自己意識の自立性と非自立性、支配と隷属」の節が重要である。そこでこの二節を見直すことで、自己意識（人間）の自立性の根源を探っていくと思う。

生命 — 個と他在、個と全体の関係 —

意識は客観的対象を相手にすることで「私は私である」ということにたどり着いた。そこまでたどり着いたという意味で、この命題は肯定的なものである。しかしこのままの状態では、「私は私である」という言い方は

「運動を失った同語反復」（一三八頁）にすぎない。つまり、「私は私である」ということは、抽象的・観念的な意味で達成されているにすぎない。「私」はまだ純粹な「点」にすぎないのであって、客観的に他の述語を付け加えなければ、具体的な「私」になることはできないのである。「他在を否定することで自分の自立性を確認する」、「これが「欲望 (Begierde)」と呼ばれる自己意識の性向である。このような自己意識の対象となるのは、「生命 (Leben)」である。

ふつう「生命」と言うと、生きている個体のことのように思われる。しかしヘーゲルの考えている「生命」は、むしろ生きている個体 (das Lebendige) が相互に関係し合う運動の全体を指す。意識が自己還帰して自己意識となったときに、対象も以前の「客観的に存在する対象」であるだけではなくて、対象は自己意識との関係のなかで存在する「生命の一分肢」となっているのである。もちろん自己意識自身も同じ「生命の一分肢」なのだが、まだ自分自身をそのようなものとして理解していない。自己意識はこの新たな対象に関わることで、この対象の自立性を経験する。そしてそのなかで、

自分もまた「生命」の渦中にいることを認識していくこととなる。

このような生命概念において、「意識が自己意識となる」ということの背後にあるものがまずひとつ明らかになる。つまりここでヘーゲルの「個と全体」についての考え方が初めて明らかになるのだ。自己意識はこの章を皮切りにして最後の叙述においてまでの主役であり、またその道程を通じて自己の背後にあるものを経験し自覚してゆく。実はその背後にあるものは様々な形で現れてくる他者存在、あるいは自分に対立する全体性なのであるが、それが第一のものとして現れるのがこの生命概念においてである。したがって、「意識が自己意識になる」ということの第一条件として、ここの生命概念があると考えられる。

生命の自立性の経験、「他の自己意識」の

必要性、自己意識同士の関係へ

欲望する自己意識は他在を廃棄するうちに、他在の自立性を経験する。つまり他在を廃棄するためには他在が存在しななければならないということを知る。つまり欲望

の本質は、欲望する側の自己意識にあるのではなく、「自己意識ではないもの」(一四三頁)、つまり、対象側に位置する他の生命にある。だが自己意識が「自分は自立的存在だ」ということを確認するためには、この生命を廃棄せざるを得ない。廃棄してしまえば、自己意識の満足はなくなってしまう。生命が対象であるかぎり、自己意識はこのような循環に陥ってしまう。というのも、生命としての対象は確かに自立的なものではあったが、自立性を失うときに同時に存在をも失ってしまうからである。これでは自己意識は自立性の確認を得られなくなる。そこで自己意識が持続的な自立性を獲得するには、その対象が「自分自身のもとで否定であり、かつそのなかで同時に自立的であるような」(一四四頁)存在でなければならぬ。それはつまり「自己意識」である。「自己意識が自分の満足に到達するのは、ある他の自己意識においてのみである」(同右)。そこで、「他の自己意識」が対象となる必要が出てくるのである。

このように、自己意識は生命についての経験をした。そして次の対象は「他の自己意識」となる必要が出てきた。自己意識が満足に達するには、その対象は生命的に

存在するだけではなく、「生命ある自己意識 (lebendiges Selbstbewusstsein)」(同右)でなくてはならないのである。

したがってここからは、複数の独立した自己意識の関係を叙述されることになる。すなわちこのことは「精神 (Geist)」の概念、「我々なる我、我なる我々 (Ich, das Wir, und Wir, das Ich ist)」(一四五頁)というこの真実が具体的に現れてくるということの意味している。

ただしここで注意しておくことがある。それはこの場面の解釈にも関わることである。確かに、自己意識の対象は「生命」から「他の自己意識」になる必要がある。これが生命の経験における第一の意義である。だが当の自己意識は、対象が他の自己意識に変わらざるを得なかったことの本当の理由を自覚していない。つまり、その理由が自己意識の行為自体に備わるものだということが自覚していないのである。この必要性を理解しているのは客観的な立場にいるもの(ヘーゲル、あるいはヘーゲルの叙述を理解する私たち)だけである。

このことは、自己意識が自分で対象を「他の自己意識」に変えるのではない、とも言い換えられる。自己意

識はここで「生命」を否定し、それを通じて「生命」がどういう存在なのかをようやく経験したばかりである。

だから、ここで自己意識が自分で対象を「他の自己意識」に変えるということは筋の通らない話になる。自己意識はまだ「他の自己意識」について経験していないのだから、「他の自己意識」という存在すら知らないのだ。あることさえ知らないものを対象にできるわけではない。

だが諸解釈では、「自己意識が自分の対象の変化を知っている」あるいは「自分で対象を変えている」とするものが多い。⁽⁵⁾ここでの解釈のズレは、後の「生死を賭けた闘争」に対する理解に影響することになる。このことについては後に触れる。

自己意識が「他の自己意識」というものを経験し、その存在を認識していく場面は、後の「生死を賭けた闘争」である。自己意識はそこで、単なる「生命」だと思っていたものなかでもそれ以上のもの(生命ある自己意識)が存在することを経験する。そうして初めて、「他在」でしかなかったものが「他者」として認識されていくのである。

相互承認の概念 — 自立性を成り立たせるもの —

こうして、次に描かれるのは「自己意識同士の関わり合い」となる。だがヘーゲルは、自己意識相互の具体的な運動を叙述する前に、この運動の概念的な説明を行う。この説明は六つの段落から成っている。初めの三つの段落で、自己意識の行う一方向的な行為が挫折してゆく必然性が説明される。そして四・五段落目で一方向的な行為の不十分さが指摘され、六段落目で自己意識のあるべき姿(相互承認)が描かれる。初めの「一方向的な」行為とは、先に見た「生命」に対しての自己意識の行為のことであり、また同時に、この次に自己意識が進み入る「生死を賭けた闘争」における行為でもある。それは四段落目で「一方の行為(das Tun des Einen)」と呼ばれるものである。

「一方の行為」は相互的な行為ではない。この行為は他在を否定する行為である。自己意識は本来そのような性格を持つ存在として登場しているのであるから、初めはこの行為をせざるをえない。しかし他在を否定しようとするとかえって他在が「他在」として現れてくる。つ

まり「自分」と「他在」との間に屹立する深淵が自覚され、他在はかえってその存在を明確に示してくるのである。「生命」の場面を思い返して欲しい。あの時のように、自分の自立性は確保されないままである。「相互承認」の概念が説明される箇所において、まずこのような挫折の過程が描かれる。

従来の解釈のなかには、この「一方の行為」(つまり初めの三つの段落)が承認の概念のうちに入っている、と解釈するものがある。それは次のようなものである。

自己意識は「一方の行為」を行うことで、自分を「自分」として、他在を「他在」として認めることができる。そしてその「承認」が各々の自己意識によって行われることで、相互承認が成立する、というのである。⁽⁷⁾だがそうすると、自己意識が相互承認を獲得するためには互いに廃棄し合えばよい、ということになってしまう。

したがって、そのような解釈は誤りと言わざるをえない。自己意識は「生命」を対象にしていたときのように、他在の否定によって自立性を確認し続けられないということを自覚するにいたる。つまり、「自分の自立性を覆すもの」としての他在を認めざるを得ないのだ。それ

がここで言われている「一方の行為」の実相である。これは自己意識自身にとっては否定的なごととして現れる。しかし客観的に見れば、そこには肯定的な意義が浮かび上がってくる。自己意識は確かに、他在の自立性を「自分にとって否定的なもの」として認識する。だがこのように認識することが、逆に肯定的な意義を併せ持つ。すなわち「他在がそのようなものとして存在していると認識している」とも言えるのだ。そして自己意識は、「他在がある」という前提を持ち（具体的に言えば「生命」という他在、あるいは「他の自己意識」という他者を認識するということである）、新たに自立性を求めてゆくのである。

さて「一方の行為」が挫折するとしたら、自己意識の自立性はどうすれば確保されるのか。それは「相互承認」による。先の段落構成で言えば六つ目に描かれていることである。自己意識が客観的に自立性を確認するには、自分の自立性を「客観的に認めてくれる」ものがないければならない。それは前に「生命」であった。しかし生命は持続的な承認をすることができず、その存在を否定されると同時に、消滅していった。そのため、「否定

されつつなお存在することができる」ものが対象にならなければならない。それが「他の自己意識」である。他の自己意識は自分の自立性を自分で否定して、他者の自立性を承認し続けることができる。これで持続的な承認が生まれるわけである。しかしそれが一方だけにとどまるなら、それは一面的な承認でしかない。ふたつの自己意識が互いに承認し合って初めて、双方の自己意識が自立的になるのである。これが「相互承認」である。

しかしこれが自己意識によって具体的に実現されるのはまだまだ先のことである。だいいち、自己意識は自分の対象をまだ「生命」としてしか見ていないのである。だが、哲学者の立場からすれば、何よりもまず自己意識の対象が「生命」から「他の自己意識」となる必要が出てきた。そこで自己意識は他の自己意識と面することに

生死を賭けた闘争

— 他人を「物」と見る自己意識 —

こうして自己意識は生命以上のものに出会うことになったのであるが、自己意識は初め他の自己意識を単なる

「生命のあり方に沈み込んだもの」(一四八頁)としてしか見ていない。したがって自己意識が取る手段も変わることはない。つまり、他在を一方的に否定して、自分の自立性を確信しようとするのだ。自己意識が自分の自立性の確信を真実に得るためには、一方の意識だけではなく他の意識が存在しなければならぬ。にもかかわらず、自己意識はその必要不可欠な「他の自己意識」を「否定されるだけの存在」としてしか見ることができない。そのため、自己意識はこの他在を否定することで目的を達成しようとする。こうして、自己意識は自分に自立性の確証を与えるはずのもの、相互承認のために絶対欠かすことのできない他者を自分の手で捨て去ろうとする。すなわち、この行為は「一方の行為」だと言ふことができる⁽⁹⁾。自己意識は生命に対してと同じ行為をする。したがって、その帰結も生命の場合と同様、循環に陥る。

しかしこれまでとは異なる状況も現れている。確かに、各々の自己意識は「他の自己意識」であるはずの対象を今までどおり「生命のあり方に沈み込んだもの」としてしか見ていない。だが他面で、対象も「他の自己意識」になっているのだから、この対象も自分が否定される

(殺される)ことに無関心でいるわけではない。対象の方でも他在を一方的に否定しようとする。「殺される前に殺そう」とする。つまり「一方の行為」が両方の自己意識によって行われ、またその否定的な行為が相互の自己意識に向けられることになったのだ。

したがって、これまで主体側として描かれてきた自己意識は、今までの対象の反応とは異なるものを受け取る。以前の対象であった「生命」は、自己意識が否定しようとしても主体的な反応をしてくるものではなかった。しかし今度の対象は自分を殺そうと向かってくるのである。生命のときは一方(自己意識)が他方(対象の生命)に否定をもたらずという構図だった。言い換えると対象の生命を殺すという一方的な行為だったのだが、ここでは複数の自己意識が互いの死を求め、つまり「殺しあう」という相互的な行為になった。そこでふたつの自己意識は「生死を賭けた闘争」に突入する。

諸解釈との相違点

諸解釈のなかでは、この「生死を賭けた闘争」を「承認を要求する(めぐる)闘争」と解釈するものがある。

それによると、「自己意識は他の自己意識に自分の自立性を認めるように要求し、闘争する」のだという。このような解釈は、「生命」における解釈のズレから続くものである。つまり、自己意識の対象が「生命」から「他の自己意識」となったことを自己意識自身が知っている、と考えるところから生じているものである。この考え方によれば、自己意識はすでに他の自己意識を認識していることになる。そのため自己意識は「他の自己意識に自分の自立性を認めるように要求する」のである。だがそうすると、自己意識はなぜ他の自己意識を殺そうとするのだろうか。要求することと殺すことは同じことではないし、そもそも殺してしまっは自分の自立性を承認してくれるものがなくなってしまうではないか。⁽¹⁰⁾

実際のところはそうではない。各々の自己意識は、互いに相手を自己意識であると認めていない。各々は相手をまだ「生命」としてしか見ておらず、この対象を否定しよう（殺そう）とするのである。そのため「闘争」となる。つまりここで行われているのは、自己意識が「生命」に向けていた行為と同じ「他在の否定」であり、さらにそれを各々の自己意識が相互に向け合う、というも

のである。だが、この「殺し合い」のなかでこそ、自己意識は対象に「生命」以上の存在を見いだすことになる。「否定される生命でしかない」と思っていた対象が、自分を殺すような存在として現れてくる。自分と同じことを意志している。自己意識は、他在がそのような主体性をもっているものだということを初めて経験する。すなわち、この闘争を通じて、自己意識の対象は自己意識自身にとって初めて「自己意識」となる。言い換えれば、「他在」が「他者」として顔を出してくるのである。そうして自己意識は対象を「生命ある自己意識」として認めるようになる。⁽¹¹⁾

この闘争の帰結として、自己意識の間の関わり方が変化する。それぞれの自己意識は闘争のなかで生命を越えようとするが、それに耐えられない自己意識が現れる。この自己意識は「死」をまのあたりにし、自分の生命を手放すことができなかった。そこで、闘争から逃げ出し他者に屈し、自分の生命を確保する。他方、死の恐怖に打ち勝った勝者は、何も変える必要はない。この自己意識は「生命的な形態に依存していない」ということを実

際に証明できてしまったからである。こうして、自己意識の行為の相互性も「単純に否定し合う(殺し合う)」「という形態から「否定する側―否定される側」という関係を維持するような形態に変わってゆく。

しかし「自己意識の自立性」の観点からすれば、ヘーゲルは負け側の自己意識の方に自立の可能性を与えている。⁽¹²⁾それが明らかになるのが、「支配と隷属」の叙述においてである。

支配と隷属 ―「一方の行為」の帰結―

この闘争の結果、自己意識はふたつの側に別れる。つまり「勝ち組」と「負け組」である。闘争を完全に克服した「勝ち組」は、自分の自立性を対象のもとで確認することができた。つまり、「一方の行為」を完遂できた自己意識である。そして、闘争に破れ、自分の「死」に打ち勝つことができなかった「負け組」は、自分の「生命」を保持するために自分の自立性を放棄する。これは「一方の行為」をあきらめたということである。こうして、支配する側の「主(Herr)」、隷属する側の「奴(Knecht)」という関係ができあがる。⁽¹³⁾

「主」は闘争に打ち勝つことによって、自分の生命という「物性(Dingheit)」を断ち切った。したがって、自分の「生命」という物性を捨てられなかった「奴」を支配することになる。また、「主」は「奴」を支配することで「物」を支配する。つまり、「物」を「奴」に加工させることによって、純粹に「物」を享樂することができるようになったのである。「欲望」は「物」の自立性によって挫折したが、「主」は「奴」に「物」の自立性を委ねることで、うまい汁だけを吸うことができるようになったのである。さらに「主」は、「奴」によって「自立的な存在である」と承認されている。

「主」はこのように自立的な存在になることができたように見えるが、ここで実は「奴」の方が自立的であった、ということが明らかになる。なぜなら「主」の本質は「奴」の行為だからである。「主」が行っている「物」の否定を実際に行っているのは「奴」であった。つまり「主」が非本質的だと思っていた「奴」の行為の方が、実は「主」の本質だったのである。

では、「奴」は具体的にはどのような過程をたどっているのだろうか。「奴」は「生死を賭けた闘争」で自

分が死ぬことに耐えられなかった。そして自分の自立性を放棄し、「主」の支配下に入った。そこで「奴」に現前するのは、物性を支配した「主」の差し向ける「死の恐怖」である。「奴」はこの恐怖のために、自分の全存在を揺さぶられる。自分の存在など在于て無きがごとしである。しかしこの動揺は、「自分を外に見る」ということでもある。自分の生き死にを外部のものが握っている。「奴」は「主」に奉仕し、自分の主体性を具体的な形で滅し、外部に自分の意志を認める。そして、「主」に命じられた労働を行う。

この「労働」において、「死の恐怖」によって動揺させられた「奴」自身の存在が外部に刻まれることになる。つまり、物を加工することで、「奴」の意志が「形式(Form)」として対象世界に現れたのである。単なる「物」であったものに、「奴が作り上げたもの」という意味としての「形式」が与えられるのだ。そして、「物」は単に廃棄されるのではなく「加工」されるだけであり、その存在はなお持続しているため、「形式」は消失することなく存続する。つまり「奴」は「労働」することにによって、「欲望」や享樂する「主」が成しえなかった

「自己の確証」をはからずも成就することになったのである。

とはいえ、「奴」はあくまで「奴」である。「奴」の意志は「主」の意志であるから、「形式」として刻み込まれているのは「奴」自身の意志ではない。そういった意味では「奴」は完全に自立的になったということとはできない。しかし哲学者の立場からすれば、「意志—形成—現実化」という過程(つまり自立的な行為を行うということ)を自己意識が自覚するという、新たな形態が現れたことになる。以上が「支配と隷属」の展開である。

「一方の行為」の挫折

ここでは自立的な主体が「主」から「奴」に逆転していく運動が叙述されている。そして「奴」が本来的な自立性を得られる自己意識となった。しかし没落する「主」の方にも、それなりの意義を有している。つまり「主」が没落してゆく成り行きは、「一方の行為」が現実的に挫折する様子を描いていると言えるのである。「主」は「欲望」から引き続いていた一方的な他在否定を完遂してしまった。しかし、その完遂自体が「主」を袋小路

に陥れたのである。「主」が行うことといえは、加工された「物」を享樂するだけである。そこにあるのは「他在の否定」という虚無でしかない。逆に、「一方の行為」をあきらめた「奴」の方が、自立性を獲得することになった。したがって、「一方の行為」がそもそも破綻するしかないものだ、ということが明らかになったのである。「一方の行為」が追求していた「自立性」とは、まったく実のないものであった。だが、この「自立性」を追求し、それが実のないものだと知ることこそが、本来の自立性を築く第一歩となるのである。

自立性の本質に向けて

以上において、自己意識の始まりにおける過程を概観してきた。自己意識はこのわずかな場面において、すでにいくつかの重要な経験を経た。それをまとめてみよう。自己意識は、自分という個別的な存在が他在との関係である「生命」のなかに位置づけられること、そして「他の自己意識」というものが存在することを経験した。そして自己意識はこの新たな対象のもとで自立性を確認しようとするが、そこにも落とし穴が現れた。「主」は

「欲望」から引き続く自己満足的な他在・他者の廃棄を続けていたが、この一方的な廃棄を持続的に続けるためには、対象の側で持続的に「廃棄され」続けなければならぬ。そしてこの廃棄の本質は、「廃棄され続ける自己意識」の方であった。主奴の立場は逆転し、「主」は袋小路に突き当たる。こうして「一方の行為」は挫折にいたり、「一方の行為」を放棄した自己意識が逆に自立性を獲得できる可能性を得た。

自己意識が自立性を得るには、「奴」のように一度自分の自立性を放棄する必要がある。そして他者の自立性を承認し、自分の自立的なあり方を他者のなかに見なければならぬ。その結果自己意識は、「自分だけで存在する」ということの本質を示す。つまり、他者が存在しその他者のなかでこそ自分が存在するのだということを明らかにするのである。

人間が自立的に存在する、このことの根源には、他在・他者(他の人間)の存在、そしてこの他者との認め合いが必要不可欠である。ヘーゲルによってこの真理が必然的に示された。このことははや漠然と提出された

真理ではない。自己意識が実際に「一方の行為」を貫き、それが挫折することを通じて整然と明らかにされたことである。⁽¹³⁾

以上のことは、私たちが自立的に存在しているということの第一の前提となることだ、と言えよう。そして私たちは、しばしばこの前提を当然視しがちである。ヘーゲルはこの前提の必然性を、一貫した論理によって説得してくれたいように思える。

* ヘーゲルのテキスト *Phänomenologie des Geistes* (『精神の現象学』はズールカムプ版を使用した。訳は引用者によるもの。引用の際には頁数の記載に略す。

例：(一四七頁)

(1) ここで見ていくのは、主体的に行動する自己意識が生命を対象に行動する場面である。ヘーゲルはそれに先立ってまず哲学者の立場から見た生命概念を客観的に叙述しているのだが、本論にとってそれを説明する重要性は無いと思われるので、ここでは割愛する。

(2) 『ヘーゲル「精神現象学」入門「新版」』ではこの循環の説明を欠いており、対象を「他の自己意識」にする必然性が失われている。

(3) コジエーヴは次のように述べている。
「否定によって構成される自我の肯定的な内容は、否定

された非自我の肯定的な内容次第で決定される。したがって、欲望が『自然的』非我に向かうならば、この自我自身もまた「自然的」自我となる。このような欲望が行動により充足されることによって創り出される自我は、この欲望が向かう物と同一の本性を具えることになる。つまり、それは「物のような」自我、ただ生きているにすぎない自我、動物的自我となるであろう。そしてまたこの自然的対象と相関する自然的自我は自己感情として以外に自己および他者に対して開示されうることはないであろう。この自我が自己意識に至ることは決してないであろう」(A・コジエーヴ、一九八七年、一三頁)。

コジエーヴにとって「人間とは自己意識である」(同書、一一頁)から、自然的な生命を対象にしている欲望は、まだ人間となっていない、ということであろう。

(4) ヘーゲルが緒論 (Einleitung) で行った解説を適用できるだろう。「この(叙述の進行の)必然性自体だけは、あるいは新しい形態(これは意識に対してどのように生じるかが意識に知られることなく生じるのだが)の発生だけは、我々(哲学者の立場にいるもの)にとっていわば意識の背後で起こることである」(八十頁、〔〕内引用者)。

(5) ガダマー、高田純など。

(6) ここで「他在」という言葉は「他の存在」という意味だけではなく、「他者(他の自己意識)」という意味も含意していることに注意しておきたい。ここで行われているのは概念的な説明なので、ヘーゲルは両者をまとめて「他

在」と言っている。

(7) ガダマー、金子武蔵、出口純夫など。

(8) 現在の私たちが「私は自立的である」と自分自身で認めることができるのも、まず他者によって認められて初めて可能になることである。自己意識は自分を承認することを他者から学ばなければならない。自己意識は初め、自分の根本的な性格である他者否定しか行うことではない。「自分を自分で認める」ということも初めは無いのである。他者から外的に承認されることで、「自分が認められる」とことを内面化することができ、「自分を認める」という行為とその意義を認識することが可能になるのである。

(9) 高田は、ここで「生命」に対してなされていた行為、すなわち「欲望」の立場が乗り越えられている、とする。

「(11)にあるのは他人への『欲望 Begierde』ではなく、他人への『要求 Forderung』である。」(高田純、一九九四年、一三二頁)。この誤解も、ここでの自己意識の状態に対する彼の理解から由来していることがわかる。つまり彼は、ここでの自己意識が自分の対象である「他の意識」をたんなる「物(生命)」としてしか見ていない、ということと理解していかないのである。他人に「要求」するためには、「要求するための相手(つまり他の意識)」がすでに自己意識に認識されていることが必要なのである。

(10) 高田純、ガダマー、コジェーヴ、イポリットなど。ガダマーは、「生死を賭けた闘争」を「名譽を賭けた決闘」のごとく解釈している。コジェーヴ・イポリットは、生命

のところでは「自己意識は対象を自己意識だと認識していない」としているにもかかわらず、「生死を賭けた闘争」での自己意識は「対象を自己意識と認識している」と解釈している。これでは「自分の対象は自己意識である」と認識する過程が説明されていないことになる。「生死を賭けた闘争」こそが、その過程である。

(11) メルロポントイ参照。

「私が他人によって脅かされていると感ずるのは、彼の眼なざしが私を物に還元するその瞬間に、私が自分の主体性を体験しつづけている限りにおいてではない。私が他人を奴隷状態におとしめるのも、私が彼を物として眺めているまさにその瞬間に、彼が依然として意識および自由として私に現前しつづけるからにはかならない。相剋の意識は、相互関係とわれわれに共通な人間性の意識によってのみ可能なのだ。われわれは、互いに相手を意識として認めあうことによってのみ、互いに否定し合う。私とはあらゆる物と他人との否定にほかならないが、この否定は、他人による私の否定によって裏打ちされることによってのみ完成するのである。死および無としての私の自己意識が欺瞞的であり、私の生と私の存在との肯定を含んでいるのと同様に、敵としての他人の意識も同類としての他人の肯定を含んでいる」(M・メルロポントイ、一九八二年、九八頁)。

(12) メルロポントイ参照。

「…人間の状況をこの上なく正確に意識しうるのは、主

人ではない。主人とは、その上でおのれの絶望と驕りが作動しているはずの存在と交流の地を知らないふりをしている人間のことだからである。そのような意識をもちうるのは、真に恐れを感じ、敵を武力で征服することをあきらめ、その人こそが生への愛をもっているが故に彼のみが死の経験をもっているところの奴隷なのだ(同書、九九頁)。

(13) 「奴」は「主」によって服従を強制されているのではない。コジエーヴは「服従を強制されている」とするのであるが、服従させなければならぬような相手はすでに自立的な存在であるはずだから、筋が通らない。

(14) これが「ヘーゲル個人の理屈でしかなく、普遍的真理とは言えない」という批判はあまり重要性を持たない。この理屈を越える他の理屈を提示しなければ、批判にはならない。

参考文献

H—G・ガダマー：『ヘーゲルの弁証法』山口誠一／高山守訳、フィロソフィア双書29、未来社、一九九〇年。
(原書名：Hegels Dialektik. Sechs hermeneutische Studien, J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), Tübingen, 2., vermerkte Auflage, 1980.)

J・イポリット：『ヘーゲル精神現象学の生成と構造』上巻、下巻、市倉宏祐訳、岩波書店、一九七二年。

(原書名：Genèse et Structure de la Phénoménologie de l'Esprit de Hegel, Tome 1 et 2, Paris 1946)

A・コジエーヴ：『ヘーゲル読解入門——「精神現象学」を読む』上妻精・今野雅方訳、国文社、一九八七年。

(原書名：Introduction a la lecture de Hegel. Leçons sur la Phénoménologie de l'Esprit réunies et publiées par Raymond Queneau, Paris 1947)

M・メルロ＝ポンティ：『ヘーゲルにおける実存主義』『意味と無意味』所収、滝浦静雄ほか訳、みすず書房、一九八二年。

(原書名：L'Existentialisme chez Hegel. In : Sens et Non-sense. Les Editions Nagel, Paris 1948)

加藤尚武(編)：『ヘーゲル「精神現象学」入門「新版」』有斐閣選書882、有斐閣、一九八三年。

高田純：『承認と自由』未来社、一九九四年。
出口純夫：『精神と言葉』創文社、一九八〇年。

一九九九年三月十二日 受稿
一九九九年三月二十四日 受理
(日本オラル株式会社)